



フローズン・ミュージック

FROZEN MUSIC

Francis King

フランシス・キング 飯田隆昭訳

FROZEN MUSIC
Francis King

福武書店

Francis King ; Frozen Music

©Francis King,1987

Japanese translation rights arranged with Century Hutchinson Publishing Group Limited through Japan UNI Agency, Inc.

フランシス・キング
フローズン・ミュージック

飯田隆昭 訳

1991年 1 月14日 第一刷印刷

1991年 1 月21日 第一刷発行

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南2-3-28

電話 東京 (03)3230-2131 振替 東京 2-87372

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

装幀 荒川じんべい

©Takaaki Iida 1991

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-8288-4016-8 C0097

NDC 930 188 220p

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

フ
ロ
ー
ズ
ン
・
ミ
ュ
ー
ジ
ッ
ク

最初に気づいたのはカーステイだった。黄昏が迫り、道路の西側に生えている、土埃にまみれたみすぼらしい樹木のあいだから、陽光がよろい戸を抜けて来たように斜めに傾いて射し込んでいた。平行棒のような陽射しを浴びているあたりの大気はどんよりと澱み、温帯性気候とは異なつて澄んでもいず、爽やかさがなかった。車が街に近づくと、遠くの工場の煙突から吐き出された煙のせいで上空は金属性の光沢を帯び、オレンジ色に染まっている。「ねえ、あれを見て、あれを！」とカーステイはまたも声を張りあげた。彼女に喜びと驚きをもたらし、好奇心をそそのかすのそばを通るといつもこうだった。

しかし時すでに遅しで、父も私も見ることはできなかった。私たちの乗った車は大気の中へすつと舞い上がったたり、激しく揺れながら深淵の中へと落ち込んだりするような感じ

をあたえつつ、ひたすら走りつづけた。走ったあとに土煙が渦巻いていた。父はもそもそ体を動かして目を開け、顎から糸を引いているよだれを手の甲でぬぐった。「な、何だ？」いつもは冷静さを保っている父だが、眠りから起こされたときにだけ現わす苛立ちをあらわにし、たずねた。「こんどは何だね？」

カースティは身を乗り出し、愛情のこもった、たくましい手を父の肩にのせた。「何だか気になるものが見えたの。幻覚だったのかしら。道ばたに『歓迎、バルラム』と書いてある掲示板が見えたんです」

「そんなこと書いてあるわけじゃないか。バルラムの近くに来てるはずはないんだ。だったらすぐ私にわかるはずだが」

「確かにそう書いてあったんだけど」カースティは笑った。「みなでバルラムのことしゃべってばかりいたから、ひょっとすると幻覚だったようね」彼女は裂け目のできた座席にまた寄りかかった。幾日も長時間日光にさらされて漂白されたようなこのフィンランド女の髪の毛は、車内に射し込む夕陽の斜光のために、灰色がかって見えた。何もこれがはじめてではなかったが、私は彼女の美しさに驚嘆した。六十一歳の父が、私よりほんの三つ

年上で三十歳になったばかりの彼女と結婚できたとは何とラッキーな、と思つてはいた。

そこはやはりバルラムだった。こわれかかり、歪んだ塀の背後に学校か、会社か、役所らしきビクトリア王朝風のゴシック建造物がちらと見えた。この塀に看板がかかつていて、近づいて行くと、正面に柱廊を構え、その前に車道を配した四角い建物の絵がそこに描かれ、下に「アクバ・イン」という文字がある。「ねえ、見て、あ、あれを！」とカーステイ。

「ここはバルラムかな？」と父は顔を横に向け、運転手のラジブにきいた。父親が甘やかした子供に言うような、鷹揚な口ぶりだった。父はいつもラジブにはこんな口ぶりで話しかけていたのである。道路とは名ばかりのところを何時間も車に揺られて来たのだから、父くらいの年齢の者なら、もっと声をあらげていたかもしれない。

「いや、違います、だんな様、そんなはずありません。バルラムはもっと西のほうで、だんな様。戻るときはバルラムを通りますが。ここはバルラムじゃないです、だんな様」だが私はすぐに、ラジブが恥じ入った、不安げなそぶりで答えるのを見て、この男こそがバルラムなのはすでに知っているなど確信した。私は父のようにやさしい心の持ち主ではな

いので「ばかなこと言うな！ おまえは道路標識や地図も読めないのか」と怒鳴りなくなる気持を抑えた。なぜなら、カーステイに私を不利に導くような父との比較をしてほしくなかったからだ。いまとは違って、以前はこんなことを意識したこともなかった。

「誰かにきいたほうがいいわね」とカーステイは言った。ハンドルを握っていたインド人がこの言葉を聞き入れた様子ではなかったので彼女は体をせり出し、父のときと同様愛情をこめラジブの肩に手をのせた。「ラジブ、お願い、誰かにきいてみて」

この恥辱の瞬間、ラジブの心につかま私たちを憎む気持が生じたのがわかった。彼はスピードを落とし、道ばたの売店の前で車を止めた。棕櫚の葉でふいた屋根の下で暗がり、ひとかたまりの男たちがブリキのどんぶりやら、紅茶のカップを目の前にして縁台の上でしゃがんだり、寝そべったりしている。

連中はすぐみな叫び声をあげ、何人かはさかんに身振りさえ混じえていた。これでここがバルラムであることがはっきりした。

「ここはバルラムでした、だんな様」ラジブはおのれの犯した罪の告白でもするかのように、父に向かい震え声でつぶやいた。

カーステイが日焼けした健康な顔に白い歯をみせて笑った。「どうしてここへ来てしまったのかしら、ラジブ？」

「ま、かまわんじゃないか」非難の矢弾にさらされている者をいつもの癖で父はかばい、素早く口を差しはさんだ。「ミスしただけだ。曲がるところを間違えただけじゃないか」

ラジブは父に感謝のまなざしを向けながらもみじめな姿をさらしている。「間違いましたです。すみません、だんな様」

父は彼のひざを軽く叩いた。「気にしないでくれ。どんなにきちんと整頓されている家の中でも間違いは起こるものだ」こんな色あせすり切れた常套句を、まるで自分の頭でひねり出しでもしたように口の端にのぼらせると、いつも私は辟易した。父は坐り直して背すじを伸ばし、前方に目をやってから横の窓から外を覗いている。「どうも様子がおかしい」と父は困惑した不安そうな声をあげた。「記憶してたのとまったく違っている。どうやらまったく違った町を記憶していたのかもしれない」

「もうかれこれ二十年近くが過ぎているんですよ、お父さん」

「そうか、もう二十年近くもたっているのか」父は母と二人で馴れ親しんだバルラムが消

えたばかりか、この地で母を亡くしたことを悲しんでいるかのごとく吐息をもらした。

「二十年たてばかなり変わることだって」とカースティは言った。

「そう、そのとおりだ」父は前方に拡がる白茶けた道に目を据えた。きっと、自分の人生の変わりように思いをはせているのだろう。インドでの放浪時代やら、イングランドで戦争を迎え、それから美術書や学術書の出版者になったいきさつなんかを。

「もうここまで来てしまったんだから、あの墓地に行きたいでしょう？」とカースティがきいた。

「いや、だめだ、いいんだ！」父は大きな声で叫んだ。手術室に連れていかれるのが明日だと思っていたのに、突然ストレッチャーが自分のベッドに近づいてくるのを目のあたりにした患者のように父はうろたえている。「予定どおり帰りに寄ろう。あまり遅い時間にインドールに着きたくないし、ライトのついていない牛車が走っていたり、道のどまん中で人がいっぱいいうろついているとを、ラジブに運転させたりするのはかわいそうだからね」

「わかったわ、あなた」

道路はだいぶよくなっていて、アスファルトにもひどい亀裂はなく、陥没もなかった。しかし、無頓着にさまよい歩く歩行者、牛、パリア犬（インドなどにいる半野生犬）がたむろし、こわれそうな荷をむやみに積んだ原動機付軽三輪車、乗客が蠅のようになって車体にしがみついている土砂にまみれたバスが通っている。たえずうるさく警笛を鳴らす車が競り合ってラジブの車を追い越そうとしていたため、遅々として進まなかった。舞い上がる土埃と道路の両側にそびえ立っている、功利主義一本槍の工場の煙突から吐き出される煤煙の膜をおしてこの光景をすべて見ているような気がした。車から降りたとたん体の不自由な乞食や、金切声をあげる物売り、うるさいガキが押し合いへし合い群がり集まるときこみあげてくる、あのうっとうしさが私を襲って来た。

「ひどいところ！」カースティが外をながめ、思わず叫んだ。「これまでのうちで一番嫌なところじゃないかしら」彼女は父の肩に触れた。「ねえ、フィリップ、あなたってバルラムはすばらしいところだと言ったと思うけど」

父はまた眠り込んでしまったような姿勢で前かがみになり、気落ちした低い声で答えた。「ここいらは工場地帯なんだ。ここをすぎたらほんとうのバルラムが見える」自分が

口にした言葉をそっくり信じたかったようだが、半分ぐらいしか信じていない、と私はみてとった。「むろんインドが変わったようにここも変わったんだろうな。農業経済だけではたちいなくなってしまった」父はこぶりな体にしては大きすぎるハンサムな顔を後ろに向け、車内でのこれは癖になったのだが教育熱心な学校教師みたいな態度で説いた。

「二十世紀インド史がいまから五十年後に書かれるとすれば、インドの産業国家化に貢献した大実業家のビルラーのほうがガンディーよりはるかに重要な人物だという通念が一般的に認められるようになると思う——ちなみにガンディーだが、ビルラーの邸宅内の敷地で暗殺されたんだ。これをシンボリックな意味合いにとる人たちもいたよ。ガンディーは紡ぎ車とか、牛車とか鋤にこだわっていた人だ。ビルラーはこのまわりじゅうに見える光景に期するところがあつた人だ」

「それだけにビルラーの罪は重いつてことね」カースティが言った。

手動の鉄道線路の踏切のところで、停車せざるをえなくなった。前には長々と他の車両などがつづいている。暗く立ちこめた夕霧の中で踏切の両わきの赤いライトが明滅していた。ターバンを巻きローブをだらりとはおり、片肘を私たちの車の横にもたせかけて自転

車のバランスを保とうとしている男も、頭の上に大きな陶器かブリキのポットをのせた女たちも、やせほそった山羊を引っ張っているひどく小さな子供もみな勤め帰りだった。遠くから汽車の音が聞こえる。そのリズムカルな音がだんだん大きくなって、やがて低くなるかん高い汽笛を長々と鳴らし、硫黄臭の漂う暗灰色の煤煙をたなびかして汽車が通りすぎた。このとき私はバルラムが重要な乗換駅であり、私の生みの母の兄である伯父がまだこの鉄道が私有で、イギリス国家の管理下にあった頃、その鉄道の総支配人であったことを思い出した。母がこの地で生を終えたのは右のような事情もあったのである。

「風呂を浴びて、一杯やりたい」と父がつぶやいた。

父よりもふけて見えたがたぶんもっと若そうな、背の曲がった、動作の鈍い男がゲートを苦勞して巻き揚げ終え、人や車がすこしずつ進むとカースティは「いまお飲みになりました。サーモスの魔法瓶にマティーニの一人分くらい残っているはずですよ」と告げた。

父は首を振った。「あとにする」父には生活を律する様々なささやかな儀式というのがある、それぞれ決まった時刻にそれが行なわれていた。マティーニは夕食前——昼食前のこともあったが——に飲むしきりになっており、別の時刻にはけっして飲まなかった

のである。

「あなたはどうか、ルパート？」

私も首を振った。「喉はからからだけど、マティーニを飲むともっと喉がかわいてしま
う」

「ほんとう？」

「ええ」

「そうなの！」カースティは魔法瓶の蓋をねじりはじめた。「じゃあ、残ったの全部私が
飲んでも気がとがめることないわね」

ラジブが肩越しに視線を向けた。「車を止めてジュースでも飲みますか、若旦那様？」
と私に向かってきいた。

「このまま行ったほうがいいんじゃないかな。この暑さで水分をとれば、汗がもっと出る
し、汗が出れば出たで、また飲みたくなる。悪循環だよ」

このときだった。“それ”を私が見たのは。カースティは見なかったはずだ。首をのけ
ぞらして魔法瓶のカップを唇に当てていたから。父も見なかったはずだ。顎をまた胸の上

にのせ、目を閉じていたから。灰色の空の下で灰色にくすんでいる工場のそばを通った。工場の周囲一面に木とトタン板で作られた小屋がいくつも並び、ヨーロッパだったら動物用の住まいとしか考えられなかったろう。小屋の外では女たちが炭火の前でうずくまり、寝ぐらに帰ってくる男たちのために夕餉^{ゆうけ}の仕度をしている。あちこちの無数の炉から立ち昇る煙が工場の煙突の煙と混じり合い、すべてのものを汚し、曇らせていた。正面に古ぼけた多数のトラックが並んでいるガソリンスタンドと、ネオンサインが「^{フージ}ビールと食事の店」と気まぐれそうにまたたいているレストランのあいだにはさまった格好で精巧な作りの錬鉄の門扉が見え、片方の側が開いていた。閉じられている側にゴシック風の文字で「共同墓地」と綴られているのが読みとれ、その上にさびの浮いたゴシック風の重厚な十字架がのっている。

爾来二十五年間ほど私は何度となく後悔にさいなまれていた。なぜあのときラジブに声をかけて車を止めさせなかったのか、せめて父を眠りから覚まさせて「いま通りすぎたところはきつとキリスト教の墓地だったはずだけど」と告げなかったのかと。思うに、私の脳裡にあったものと現実との残酷な乖離のせいでもたらされた私自身のショックと同じシ

ショックを、哀れな父により強烈にもたらすのを控えたのだ。バルラムに戻ってきたときこんなショックに父が耐えるはめにまさかなるとは、私の愚かさと臆病のせいで考えていなかったのである。

「だいじょうぶ？」マティーニをすっかり胃におさめていたカーステイが心配そうな表情で私を見つめていた。

「だいじょうぶです。なぜ？」

「よくわからないけど、あなたの様子はいつもと違ってるわ」

違って見えたのはむろん私だけでなく、あの高い門扉からちらと臉に映った墓地だった。

母が亡くなったとき私は八歳だったが、母の葬儀はおろか埋葬の場にも立ち合わせてもらえなかったのだ、これまで実際にこの墓地を目にしたことはなかった。しかし父はこの墓地のことを私に、カーステイにさえも、たびたび語っていたものだから私の心にひじょうに鮮明な記憶として残っていたのである。昨夜にしてもウダイプル州の島にある「レイ